

# 福井の異文化交流の調査と課題

脇 田 里 子

地域社会での異文化交流を調査し、その課題を提示する。本稿では福井県、福井市、福井大学の異文化交流の課題を再検討し、その対策を考察する。最大の課題は異文化交流が表面的な交流になりがちで、交流が一部の人に限られているという点である。その原因は国家レベルで日本の国際化が叫ばれても、それ以外のレベルではまだ本当に国際化の必要性が認識されていないからではないだろうか。この対策としては、異文化交流の必要性や目的を明確にすること、交流結果を含めた交流情報を積極的に公開すること、個人が自文化や異文化に関心をもち行動することが考えられる。

## 1. はじめに

近年、国際化やグローバル化が提唱され、日本では近い将来に多文化多言語多民族共生社会が到来すると思われる。大学でも新しい「国際」や「異文化」を題する学科が増設され、国際視野を身につけた学生の育成が期待されている。本学でも平成11年度、教育学部は教育地域科学部に改組し、教員免許状を出さない地域文化課程の中に、異文化交流コースが新設された。

自分の住んでいる地域社会や所属組織の中で、具体的にどのような異文化交流が実施されているかを知る者は多くはない。つまり、交流先がどこで、その交流先はどんな相手なのか、いつ、なぜ交流が始まったのか、今までにどのような交流をしてきたのか、その地域社会の住民や組織の人はその交流をどう評価しているのか、今後も交流を続ける場合の課題は何かなどを把握している者は少ない。そこで、福井の地域社会として福井県、福井市、そして、所属する組織として福井大学の異文化交流を調査し、実態を把握した。本稿ではそれらの異文化交流の課題を再検討し、その対策を考察する。

なお、本学地域文化課程の基礎専門科目「異文化交流論」でも、福井の異文化交流の取り組みを調査し、課題をレポートにまとめる作業を行った。その結果をWWWで公開している[1]。そこで、本稿の一部に学生の提案した課題や対策を含めている。

## 2. 異文化交流の定義

異文化交流は基本的に異なる文化圏での個人間の交流である。厳密に言えば、同一国における異なる文化圏の個人の交流、例えば、日本国内におけるアイヌ民族と日本人の交流も異文化交流にあたる。しかし、本稿では、異文化交流の事例として、同一国内の異なる文化圏の交流は取り上げない。また、異文化交流と似た用語に「国際交流」がある。国際交流の定義には「広義には、国際間の政治、経済、文化の人的、物的交流を意味するが、狭義には国際文化交流を指す。」とある[9]。国際交流は文化の交流を国家という枠組みの中で、政府主導で進める意味合いが含まれる。一方、異文化交流は個人が文化を越えて交流する意味合いが強くなる。

異文化交流は異文化交流を実施する主体によって、図1に示すように4つのレベルに分けられる。まず、異なる文化圏での個人レベルの交流が異文化交流の基底にある。個人レベルの交流では、海外でのホームステイが代表的な例であろう。例えば、メディア教育開発センターで開発した異文化体験事例WWW “At Home in Japan” [2]では、ホームステイの受け入れ家族と留学生の2者間で、ホームステイの各過程の認識を対比している。つまり、ホームステイのある状況や出来事に対して、受け入れ家族と留学生の解釈が全く反対であることを浮き彫りにしている。このように個人レベルでの異文化交流は同じ状況であっても、その状況をどう認識し、どう振る舞うかは、受け入れ側と留学生双方の性格、異文化許容能力などの個人差が大きく影響する。

次に、個人の属する組織（団体や機関）レベルの異文化交流がある。日本の大学と海外の大学との姉妹校提携や内外のロータリークラブ同士の交流はこのレベルに属する。同じ目的をもち、利害が一致する組織同士が、交流を通じて、その目的を達成し、利益を共有する。

そして、地方自治体レベルの異文化交流がある。近年、市や県といった地方自治体は海外の友好姉妹都市と交流が盛んになりつつある。この異文化交流の特徴は、税金を資金源に交流を主催することと、住んでいる地域の国際化の状況に応じて、異文化交流の目的や方法が異なることである。

最後に、国家レベルの異文化交流がある。日本では、国の政策に基づいて外務省や外務省の外郭団体である国際協力事業団や国際交流基金などが、諸外国で事業を展開している。外国の言語文化を紹介する機関としては、アリアンセ・フランセーズ（フランス）、ゲーテ・インスティテュート（ドイツ）などがよく知られている。国家レベルの交流では、近年、日本には欧米諸国との「友好親善・相互理解型交流」からアジアでの「開発交流型交流」が求められ、ODA（政府開発援助）の使途が注目されている[11]。

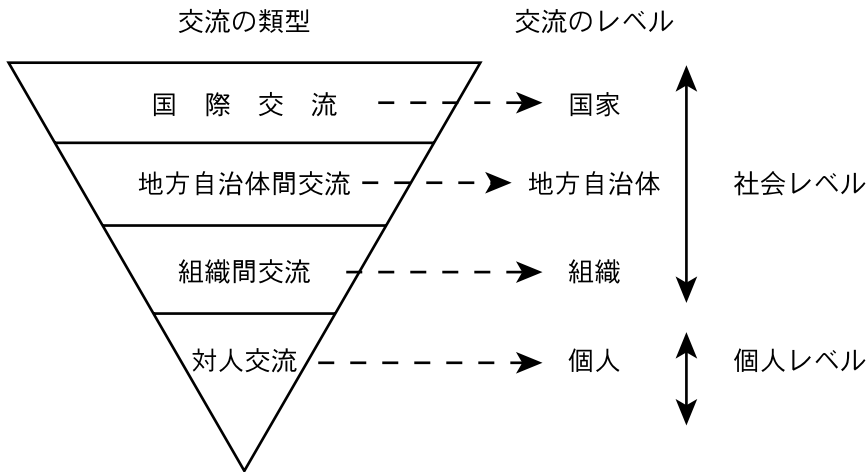


図1 異文化交流レベルの類型（文献[10] p33を参考に作成）

### 3. 異文化交流実態の調査

#### 3.1 調査対象

「異文化交流論」の授業で、自分の住んでいる都市の姉妹都市名や姉妹大学名を学生に尋ねたところ、それを知っている学生はほとんどいなかった。一般に、自分の住んでいる地方自治体や所属する組織が具体的にどのような異文化交流を行っているか、知られていない。また、地域社会によって、外国人定住者の数が異なるため、その地域社会での異文化交流の認識や問題はまちまちで、地域差が大きい。そこで、本稿では、地方自治体レベルとして福井県と福井市がどのような都市と交流を行っているのか、そして、自分の所属する組織として、福井大学がどの大学とどのような交流を行っているのかを調査する。

調査対象の都市や大学などは9つに絞った。福井県が国際交流している外国の州や省は4つある[3]が、その中でも交流の歴史の長い中国の浙江省、アメリカ、ニュージャージー（New Jersey）州を調査対象にした。同様に、福井市が外国の姉妹友好都市を結んでいるのは4都市ある[4]が、その中でも交流が盛んな中国浙江省の杭州市、アメリカ、ニュージャージー州のニューブラウンズウィック（New Brunswick）市、アメリカ、カリフォルニア（California）州のフラトン（Fullerton）市の3つを調査対象にした。さらに、福井大学が大学間学術協定（大学間交流協定、部局間交流協定を含む）を締結している36大学（2002年8月現在）のうち、教育地域科学部と積極的な交流を続けている中国の西安外国語学院[5]、浙江大学[6]、ドイツのハンブルク（Hamburg）大学[7]、アメリカのラトガース（Rutgers）大学[8]の4大学を調査対象とした。

#### 3.2 調査項目と調査方法

「異文化交流論」の授業の中で、学生グループによる9つの交流先の調査発表を基盤に、筆者が学生の調査発表で不足した内容や詳細な数値などを調査先に再確認したものを述べる。調査項

目は次の5項目で、調査にあたり、統一した調査票は使用していない。1.調査対象の紹介(所在、都市や大学の規模、主な産業、観光地、学部数や学部の種類などの特徴)、2.交流開始の時期と目的(いつ、何のために交流を始めたのか)、3.交流の内容(具体的な交流の内容、期間、人数、費用など)、4.交流の成果(具体的な交流の成果など)、5.今後の交流に向けて(現在の交流の課題や今後どのような交流を望むかなど)である。

次に、調査方法について述べる。県や市の友好姉妹都市の場合は、福井県や福井市の国際交流WWWのURL[3][4]を参照し、一般公開されている基礎的な情報を得、詳細な点を福井県国際交流会館や福井市国際交流課の窓口で尋ねた。大学の学術協定校については、学術協定校WWWのURL[5][6][7][8]や協定校の受け入れ窓口になっている教員や大学の国際交流係、留学生係に問い合わせ、調査の一次情報を得た。

#### 4. 異文化交流の結果と成果

まず、福井県、福井市、福井大学の概要を述べる。次に、それぞれの異文化交流の結果をまとめ、考察を加える。なお、福井の異文化交流を簡単にまとめたものを表1に示す。

##### 4.1 福井県、福井市、福井大学の簡単な概要

2002年現在、福井県は人口約83万人で、山や海の自然に恵まれた土地である。農業、漁業、繊維業が盛んで、嶺南地方に15基の原子力発電所がある。2002年度も東洋経済新聞社の住みやすさ統計で、住みやすい県の第1位に選ばれている。伝統産業では、越前和紙、越前漆器、越前焼が、観光地では永平寺や東尋坊が有名である。福井市は福井県の県庁所在都市で、人口約25万人である。福井大学は、現在、学部は教育地域科学部と工学部の2学部のみで、大学院は教育学研究科(修士課程)、工学研究科(博士後期課程)があり、学生数約4,000人である。福井大学の留学生数は約200名で、中国をはじめアジア出身の留学生が多数を占める。

##### 4.2 福井県と福井市の異文化交流

福井県とニュージャージー州(アメリカ)、福井市とニューブラウンズウィック市(アメリカ、ニュージャージー州)、福井大学とラトガース大学(アメリカ、ニュージャージー州)の交流は、同じ歴史的な経緯から始まっている。それは1867年福井藩の日下部太郎がラトガース大学に留学中、W.E.グリフィスの指導を受けしことに交流の始まりは起因する。その後、1871年グリフィスが来県し、明治初期の福井、日本の発展に貢献した。

同様に、福井県と浙江省(中国)、福井市と杭州市(中国、浙江省)、福井大学と浙江大学(中国、浙江省)の交流も歴史的な経緯から始まる。この場合は、福井県永平寺の開祖道元禪師が浙江省寧波の天童寺で学んだことや、福井県芦原町出身の藤野巖九郎と浙江省紹興出身の魯迅が師弟関係にあったことが交流開始の要因である。このように福井にゆかりのある歴史的な人物の異文化交流を通じて、現在の県、市、大学の交流が始まっている。また、交流が始まったのは、1972年の日中国交回復後の1975年からであり、福井市と杭州市の交流が最初で、30年弱の交流の

表1 福井の主な異文化交流先

福井*	交流先(人口)	開始年	交流の始まり	主な交流内容(毎年実施)
福井県	ニュージャージー州(米国) 8,410,000人	1990年	1867年福井藩の日下部太郎がラトガース大学に留学中、W.E.グリフィスの指導を受ける。1871年グリフィスが来県し、明治初期の福井、日本の発展に貢献した。	高校生の短期派遣(45名)、隔年で高校生の短期留学受入(30名)、高校生の長期留学(2名1年間)、高校生の長期留学受入(2名1年間)。
福井市	ニューブラウンズウィック市(米国)	1980年	ニューブラウンズウィック市の人口:43,000人、ラトガース大学:152学科、学生数48,000人	3年に1回、福井市ジュニア大使10名派遣とフラトン市のジュニア大使10名受入。
福井大学	ラトガース大学(米国)	1981年		約2年に1名ラトガース大へ留学。大学間交流協定未締結。
福井県	浙江省(中国) 44,750,000人	1987年	福井県永平寺の開祖道元禅師が浙江省の寧波の天童寺で学んだことや福井県芦原町出身の藤野巖九郎と浙江省紹興出身の魯迅が師弟関係にあったことが交流の始まりである。	高校生の短期派遣(40名)、中国語・美術・医学分野で研修生を派遣(4名半年間)、県立大に留学生2名を受入、福井・浙江友好会館「水仙楼」が落成。
福井市	杭州市(中国) 1,720,000人	1975年		3年に1回、福井市ジュニア大使10名派遣、不定期に研修生の受入や市職員の派遣。
福井大学	浙江大学(中国) 20学部 学生33,000人	1991年		大学間交流協定に基づき、年間3名以内の学生交換。日本国費留学生、私費留学生の受入。
福井市	フラトン市(米国) 120,000人	1980年	福井ロータリークラブとフラトンサウスロータリークラブが姉妹クラブを結成したこと。	3年に1回、福井市ジュニア大使10名派遣、不定期にフラトン市青少年の受入。
福井大学	西安外国語学院(中国)9学科 学生1,100人	1985年	当時の中国語教員が西安外国語学院で日本語教師として派遣された後、学生交換を始めたこと。	大学間交流協定に基づき、年間3名以内の学生交換。日本国費留学生、私費留学生の受入。
福井大学	ハンブルク大学(ドイツ) 19学部 学生45,000人	2000年	当時の教育学教員がハンブルク大学に長期出張した後、学生交換を始めたこと。	大学間交流協定に基づき、年間3名以内の学生交換。日本国費留学生、私費留学生の受入。ドイツ語サマースクール希望者の派遣。

歴史がある。一方、県と大学の異文化交流の歴史は約10年遅れ、1980年代半ばから始まる。

なお、フラトン市との交流のように、ロータリークラブ同士の組織レベルの交流から市レベルの交流に発展した例もある。県や市の交流内容は、特別行事による知事や市長、市民訪問団などの訪問があるが、それらは不定期なので、ここでは定期的に交流をしているものを取りあげる。

福井県や福井市の現在の主な異文化交流は、中高生を対象にした短期派遣である。

福井市では毎年、ジュニア大使として、ニュー Braunsvick 市・フラトン市・杭州市のうち1都市に10名を1週間派遣している。交流の内容は現地の中学校訪問やホームステイである。なお、ジュニア大使にかかる費用のほとんどは市が負担する。また、毎年、3姉妹都市のうち1都市からのジュニア大使の訪問も実施されている。

同様に、福井県では、県内の高校生を対象に、アメリカと中国に10日前後の短期派遣事業がある。アメリカの場合はニュージャージー州のラムジー高校など3高校に45名を11日間短期派遣する。ただし、2001年9月のニューヨークのテロ事件以降、アメリカの派遣は2001年と2002年は見合わせている。交流の内容はホームステイ、学校訪問、文化施設訪問などである。短期派遣にかかる費用の一部は個人負担であるが、その多くは県が負担する。また、隔年でニュージャージー州の高校生30名を短期間受け入れる。一方、長期派遣では2名の高校生をニュージャージー州に1年間派遣し、ニュージャージー州から2名の高校生を1年間受け入れる。長期派遣にかかる渡航にかかる費用の全ては県が負担する。

福井県と浙江省の間では、毎年、浙江省の杭州外国語学校に県内の高校生40名を短期派遣(9日間)や、日本人研修生4名の中国語・美術・医学分野での派遣制度(半年間)もある。また、毎年、浙江省から福井県立大に留学生2名、隔年で浙江省の高校生30名を短期間受け入れている。

このように福井市や福井県の国際交流の多くは、一部の中高生の短期留学に限られていると言っても過言ではない。そして、これらの交流は日本人を派遣する交流が外国人を受け入れる交流よりも数や回数で上回っているのが特徴である。

また、これらの交流の成果に関して、交流を推進している担当者からは明確な回答は得られなかった。短期留学を経験した当時の中高生が、国際交流関係の大学に進学したり、成人してから国際的な大手の金融機関で活躍している例があるそうである。

#### 4.3 福井大学の異文化交流

大学の主な国際交流は大学間交流協定に基づく学生交換である。大学間学術協定を締結する機会は、本学教員が海外の大学へ長期出張したり、海外の大学と共同研究したことに起因する。この協定は協定を締結した両校の間で、6ヶ月以上1年以内の期間で、年間3名以内の学生交換を行うもので、その際、受け入れ大学における授業料や入学料、検定料などを徴収しないのが特徴である。日本人学生も外国の学生も大学間交流協定のある受け入れ大学に留学すれば、国際教育協会の奨学金も得やすい。また、留学先の大学で取得した単位を自分の大学で単位互換できれば、留学しても4年間で卒業する可能性がある。

大学の異文化交流では、県や市の交流と大きく異なり、外国人留学生の受け入れと日本人学生の海外留学のバランスは、著しく不均衡で、留学生の受け入れ過多状態が続いている。例えば、2002年10月に大学間協定に基づいた福井大学への留学生（大学間協定大学出身の国費留学生を除く）は10大学24名であるのに対し、外国の大学間交流協定大学に留学している日本人学生はわずか1名である。（1ヶ月程の留学は実数が掴めなかったため、半年以上の留学を対象とした。）

大学内での日本人学生と留学生の交流は、日本人学生が主体となって留学生との交流を図る会合や、工学部の留学生担当教員が中心となって日本人学生と留学生の交流を支援している集まりなどがある。また、授業の中では、留学生と日本人学生の双方の交流や異文化理解をテーマに、留学生と日本人学生を受講生を同数に限定した授業も実施している。しかし、このような交流に関心をもつ日本人学生は極めて少数である。

学生の交流以外にも、日本人教員の海外出張や外国人研究者の受け入れなどもあるが、これらは不定期に実施されている。なお、2002年9月に福井大学創立50周年を記念して留学生国際フォーラム「留学生と地域社会の相互交流活動推進に向けて」を実施した。今までに福井大学に留学し、その後、母国で活躍している元留学生、数人にパネリストとして来日してもらい、地域社会の国際化、産業発展などについて議論した。

大学の異文化交流の具体的な成果についても、明確な回答はあまり得られなかった。留学した学生が帰国後、クラスメイトに異文化体験の話をして、その国に興味や関心を持たせることなどは容易に想像できる。ある日本人学生の留学の動機が大学で知り合った留学生である事例もある。なお、毎年、2,3名の留学生を送り出している西安外国語学院では、福井大学で学位を取得した留学生が帰国した後、協定校の教壇に立つ者が多く、協定校の教育に貢献しているという。このように、異文化交流の成果は短期間に明示することが困難であるため、長期間にわたって、少しずつでも交流を継続することが重要である。

## 5. 異文化交流の課題と対策

異文化交流の課題は次のように集約できる。それは、どのレベルの交流も一部の人だけが交流し、残りの人は傍観しているか、交流があることすら知らない状態、表面的な交流に終わっているという点である。この原因は、日本の国家レベルの問題として、多文化多言語多民族共生社会の実現や異文化交流がどんなに必要であると叫ばれても、県や市といった地方自治体レベルや大学のレベルの問題としては、それらの成員一人一人にはまだ本当に必要に迫られた問題と認識されていないからではないだろうか。では、この問題を解決するための具体的な対策を考えたい。

### 5.1 福井県と福井市の異文化交流の対策

#### 5.1.1 交流の目的を明確に

福井県とニュージャージー州のように歴史的な背景から交流が始まる場合、現在、住んでいる県民と州民の交流の目的が、県民の国際化というような一般的な目的になりがちで、交流をする

明確な目的やそれに伴う具体的なメリットがわかりにくい[12]。歴史的なゆかりをふまえて、なぜその都市と交流するのか、その交流はお互いにメリットがあるのかを再考する必要がある。例えば、同じ産業や同じ問題点(原発を抱えている町など)をもつなど共通のテーマをもつ町同士が交流すれば、同じ目的に向かって異文化交流を進めていく利点などを見つけやすいであろう。

#### 5.1.2 幅広い年齢が参加できる交流

福井県や福井市の異文化交流は、一部の中高生のアメリカと中国への短期派遣が中心である。そこで、子供から老人まで参加でき、関心をもってもらえる交流の方法やあり方を探る必要がある。県の国際交流会館では毎年、国際交流フェスティバルを開き、各国の文化などを紹介している。このようなイベントの規模を小さくして、小学校や公民館など身近なところで多数、開催する方法もあるのではないだろうか。

また、国がサッカーのワールドカップやオリンピックのように国際的なスポーツイベントを開催することも意味があろう[13]。それはサッカーワールドカップの開催でもみられたように、全国民が参加者の国やチームに関心を持ち、異文化交流の推進力になっている。

#### 5.1.3 交流情報の積極的な公開

「異文化交流論」の授業で、自分の住んでいる都市の姉妹都市名を学生に尋ねたところ、それを知っている学生はほとんどいなかった。これは県や市が発する姉妹都市の情報が少ないことや、異文化交流に関心をもつ人が少ないことの表れであろう。異文化交流の情報として、いつ、どこで、どんな国際交流を行うのかという宣伝情報だけでなく、その交流をした結果の情報も積極的に公開すべきであろう。

例えば、アメリカや中国へ短期派遣された中高生ののべ数は相当数になるはずだが、彼らの体験した異文化交流の成果を一般県民や市民はほとんど知らない。県民税や市民税を使って、国際交流をしているのなら、その結果を知事や市長や学校に報告するだけでなく、県民や市民にも何らかの形でフィードバックをし、理解をしてもらうことが望ましいだろう。

#### 5.1.4 多様な国との交流と県内の外国人居住者との交流

現在、福井県や福井市が交流をしているのは、特定の国(アメリカ、中国、韓国、ドイツ)だけである。国際感覚を磨くことなどを交流の目的にするならば、南米、アフリカ、中東、オセアニアなど、いろいろな地域の国と交流ができることが望ましい[14]。

異文化交流というと、短期間日本人が海外に行くか、または、外国人を招待してパーティをすることが目に付きやすい。現実問題としては、海外から多数の外国人労働者が来県し、数年、働いて帰国する場合も多い。このような外国の方との交流はあまり行われていないように思う。身近なところに住んでいる外国人居住者との交流を促進することが本当は必要なのではないだろうか。

#### 5.1.5 異文化や自文化に関心を持ち、行動すること

これらの対策の中で最も重要なのは、一人一人が自文化や異文化に関心を持ち、行動すること



であろう。異文化への興味や関心がなければ、異文化交流の意欲が生じないし、交流する行動にもつながらない。多くの人は自分からはなかなか行動しないが、何か機会があれば交流をしたいと考えているのではないか。例えば、ワールドカップの時に、メキシコチームが三国町でキャンプをしたとき、県内はメキシコブームだった。県内の通りにメキシコの国旗が掲げられ、挨拶程度のスペイン語が飛び交い、県民がメキシコに興味を持っていたように思う。このように交流しようという気持ちをもち、行動に移すことが大切だろう。

また、外国の人と交流をすればするほど、当初は自分の文化との違いばかりが目につく。次の段階として、なぜ自分はその文化の違いが気になるのか、自分の文化ではなぜそのように行動するのかなど、自文化に対する再認識の課程がある。このように、異文化だけでなく自文化に対する関心をもつ、行動することも重要である。

## 5.2 福井大学の異文化交流の対策

### 5.2.1 英語圏の大学との交流協定の促進

外国人留学生の受け入れと日本人学生の留学のバランスは、著しく不均衡で、留学生の受け入れ過多状態が続いている。このアンバランスの原因は、福井大学が大学間協定を結んでいる多くの大学が発展途上国の大学であることに起因する。途上国の留学生は日本の最新技術などを学ぶために、日本へ留学を希望する場合が多い。しかし、理工学系の日本人学生が途上国の大学へ留学する利点は少ないと容易に推測できる。一方、文系の日本人学生が留学する第一の目的は、外国の言語や文化を学ぶことである。その際には先進国や途上国を問わず、どの国も対象になりうるが、日本人学生の希望は圧倒的に英語圏の国が多い。

なお、福井大学が英語圏の大学として、学術交流協定を結んでいる大学にアメリカのラトガース大学がある。しかし同大学は、福井大学と姉妹提携は結んでも大学間交流協定の授業料の相互不徴収制度に反対した。そこで、福井大学の学生がラトガース大学に留学しても、他の大学に留学する場合と同様に、授業料などを納めなければならない。そこで、英語圏に留学を希望する学生は、福井大学を休学し、オーストラリア、カナダ、イギリス、アメリカなどの留学先を自分で見つけ、私費留学している。日本人学生の異文化交流を促進するには、積極的に英語圏の大学と大学間交流協定を締結すべきであろう。

### 5.2.2 留学情報の提供拡大

日本人学生が海外に留学する場合、大学を通して留学するケースよりも、留学斡旋の会社や団体を自分で探して、留学するケースの方が多い。3年程前から、大学側が留学説明会を開くようになったものの、年に1回の説明会であり、内容は留学一般についての注意事項や質問を受け付けるのである。いつでも気軽に留学相談できる体制づくりが望まれる。

また、外国人留学生が福井大学に留学する場合、事前に、教員情報や授業情報を入手することは難しい。英語による短期留学プログラムで留学する際には、そのプログラムで受講できる科目が冊子体で明示されている。そこで、それ以外で留学する場合も、何らかの形で教員情報（教員

名、研究内容など) 授業情報(授業名、担当教員名、シラバスなど)を提供すべきであろう。

### 5.2.3 留学生との交流を通じて日本人学生の国際感覚を磨くこと

多数の留学生が「日本人とは本当の友人になりにくい」と指摘する。日本人は自分の考えをはっきり言わないために、日本人が考えていることがわからないので信用できないというものである。この場合の問題は、日本人はその留学生と友人関係を築いていると想定していても、留学生の立場から見ると、その日本人を本当の友人ではないと思っているというギャップである。

日本人同士の場合では、はっきり物事を言わない方がいい場合であっても、外国人とのつきあいでは、それは通用しない。日本方式にあわせる、あるいは、その留学生の国のやり方にあわせるというものでなく、いろいろな国の人が交流する際に、どのような意思表示をすべきなのか考える必要がある。国際社会の中では、日本人の以心伝心的なコミュニケーションを有する社会は極めて少ないことを日本人学生は認識すべきであろう。いろいろな国の人が交流する際に、自分の意見をきちんと言わなければ、コミュニケーションは成立しない。

また、日本人学生はクラスに留学生がいても自分から積極的に留学生と交流しようとする者は少ない。異文化理解に関心があっても、目の前にいる留学生と交流しようとならないのはなぜだろうか。日本の国家レベルの問題として、国際化がどんなに必要であると叫ばれても、個人の問題としては、それらはまだ必要に迫られていないようだ。そうした意味を含めて、日本人学生は国際感覚を磨く必要がある。国際感覚を磨くには、本を読んで知識をもつよりも、実際に外国の方と交流をして経験をたんでいくべきである。

## 6. まとめ

地域社会の中でどのような異文化交流が実施されているのか調査し、実態を把握した。本稿では福井県、福井市、福井大学の異文化交流の課題を再検討し、その対策を考察した。

最大の課題は、異文化交流が表面的な交流になりがちで交流が一部の人に限定されているという点である。この原因は、日本の国家レベルの問題として、多文化多言語多民族共生社会の実現や異文化交流がどんなに必要であると叫ばれても、県や市といった地方自治体レベルや大学のレベルの問題としては、それらはまだ本当に必要に迫られていないからではないだろうか。

地方自治体レベルの解決策として、異文化交流の必要性や目的を明確にすること、交流結果を含めた交流情報を積極的に公開すること、個人が自文化や異文化に関心を持ち、行動をすることなどが考えられる。次に、大学レベルの異文化交流の解決策として、英語圏の学術協定校を増やすこと、留学情報の提供拡大、日本人学生の国際感覚を磨くことなどがあろう。

異文化交流といえば、日本人が短期間海外に行ったり、外国人を招いてパーティすることと思われがちである。しかし、福井県内にも多数の外国人が居住し、福井大学にも200名近い留学生が在籍している。そこで、身近に住んでいる外国人の方との交流を積極的に進め、日本の内なる国際化を推進すべきである。

参考URL (2002年8月現在)

- [ 1 ] 福井大学「異文化交流論2002」講義WWW <http://moon.f-edu.fukui-u.ac.jp/exchange02/>
- [ 2 ] メディア教育開発センター “ At Home in Japan ” <http://www.mine.ac.jp/athome/sample.htm>
- [ 3 ] 福井県県民生活部国際課 <http://info.pref.fukui.jp/kokusai/>
- [ 4 ] 福井市姉妹友好都市 <http://www.city.fukui.fukui.jp/yuukou/>
- [ 5 ] 西安外国語学院 <http://www.xflu.net/chinese1.htm>
- [ 6 ] 浙江大学 <http://www.zju.edu.cn/>
- [ 7 ] ハンブルク大学 <http://www.uni-hamburg.de/>
- [ 8 ] ラトガース大学 <http://www.rutgers.edu/>

参考文献

- [ 9 ] 石井敏編 (1997)「異文化コミュニケーション・ハンドブック」有斐閣
  - [ 10 ] 古田暁監修 (1987)「異文化コミュニケーション」有斐閣
  - [ 11 ] 功力達朗 (1995)「国際協力」サイマル出版会
- 参考にした学生レポート (平成14年度入学生 [1]にて公開)
- [ 12 ] 川崎亜希子「日本の国際交流には何が必要か」
  - [ 13 ] 出口千裕「日本の国際交流に何が必要か」
  - [ 14 ] 斎藤春佳「異文化交流の普及と多国との交流」